

# 東京都小中学校環境教育研究会会報 **東京の青い空** 第75号

会 長 箱崎 高之 調布市立上ノ原小学校 TEL 042-485-1271

事務局長 伊藤 修久 世田谷区立玉堤小学校 TEL 03-3521-1164

HP <http://kankyokyoiku.jp>

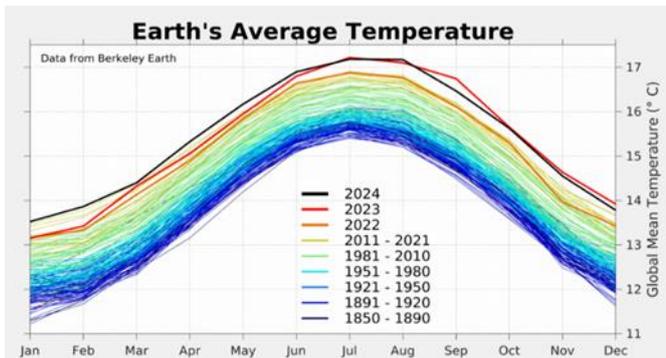
## 私たちは人間を育てる教師である

全国小中学校環境教育研究会長

多摩市立連光寺小学校長 關口 寿也

1995年に第1回目が開催されたCOP(気候変動枠組み条約締約国会議)からちょうど30年が経過しました。COP3の京都議定書、COP21のパリ協定を経たこの30年の間に、気候変動(地球温暖化)はどのような変化を辿ってきたのでしょうか。

下のグラフはアメリカ・カリフォルニアの研究機関であるBerkeley Earthの月毎の平均気温を年度別にプロットしたものです。2023年と2024年のグラフが突出しているのがわかりますが、90年代の記録はこのグラフでは帯の中位層にあり、2024年との比較で1℃近い上昇が読み取れます。温暖化の推移は、ついにティッピングポイント(不可逆点)を超えてしまったとも言われ、今後、さらに二次曲線的な気温上昇も危惧されている状況です。



学校教育にも様々に影響を及ぼしている温暖化ですが、その緩和策・適応策を学ぶ必要性の是非は教員皆が感じているところではないでしょうか。しかし、実際に教室で取り組んでみると、「学びのゴールをどこにもっていけばよいのか」「教室から状況を変えることができるのか」といった環境ジレンマが少なからず生じます。それは、教員にも子供たちにも無力感や絶望感をもたらせることにつながりかねません。温暖化に代表される、環境教育がやりづらいつられる所以です。

先日、ハンバーガーショップに入った時にこんな出来事に遭遇しました。注文したハンバーガーセットをテーブルで食べようと包み紙を開けたその時に、注文したものと違ったハンバーガーであることに気づきました。カウンターにそのことを伝えると、即座に注文したハンバーガーに快く交換してくれました。誤注文であったハンバーガーは、店員が掴み、後方のポリバケツへ。勤務校でフードロスについて日常的に取り組んでいることもあり、間違った行動をしてしまったのではという罪悪感すら湧いてきました。賞味期限や消費期限切れといった廃棄以外にも、このような種々の廃棄、つまりフードロスがあるのでしょうか。

そんな小さな違和感を教室で子供たちと共有するのはどうでしょうか。「誤注文のハンバーガーをそのままいただき、差額を調整してもらおう」「誤注文の品物は半額で販売する」「そもそも誤注文が生じないシステムを作る」「作り置きをしない」等々、子供たちからは建設的な意見が出てきそうです。地球規模の課題として捉えると掴みどころに困難を極めますが、目の前の課題を解決するという視点であれば、「将来こうするぞ」「会社に提案を試みよう」といった希望につながるはずです。この道筋もThink globally, Act locally.の一端と言えるでしょう。環境に対する自身のちょっとした違和感に光を当て、教室の題材とすることで俄然ジレンマは薄まります。授業のゴールは、「今」である必要はないのです。むしろ、子供たちに「これからどう生きていくのか」という脈々とした問いを持たせることが、環境教育、ESDのゴールとなるはずです。そこに教員としての自負と英知をかけて取り組むことは、教師本来の姿であり、使命ではないでしょうか。残された時間は、そう多くはありません。

# 第56回 全国小中学校環境教育研究大会(東京大会) 第60回 東京都小中学校環境教育研究発表会 報告

東京都調布市立上ノ原小学校 校長 箱崎 高之

令和6年12月26日(木)、第56回全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)、第60回東京都小中学校環境教育研究発表会を、エコギャラリー新宿を会場にして開催しました。会場には、北は北海道、南は鹿児島県からと全国各地から100名を超える参加者が集まりました。研究発表、講演会の概要は以下のとおりです。



## 【研究発表】

### 21世紀「環境の世紀」への提言

#### 《研究主題》 「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」 ～ 環境教育によって育む学力と環境保全意識 ～

- 1 ふるさと学習を核とした環境教育の推進  
～小学校で育てるSDGsへの問題意識と地域、関係機関と協力した取組～  
福井県大野市立阪谷小学校 校長 芦原 邦弘
- 2 キャリア教育を要とした小中9年間を見通した  
環境教育を実践するためのカリキュラム・マネジメント  
～生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒の育成～  
広島県広島市立湯来中学校 校長 大塚 由美 教務主任 藤本 祐二
- 3 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進  
～環境教育によって育む学力と環境保全意識～  
東京都小中学校環境教育研究会 会長 箱崎 高之 研究部長 鈴木 元

## 【講演】

Touson 自動車戦略研究所 代表 自動車・環境技術戦略アナリスト 愛知工業大学工学部客員教授博士(工学) 藤村 俊夫 様から「EVシフトはCO<sub>2</sub>削減の救世主になれるのか？」をテーマに、

- ①これまで各国政府や主要メーカーは、EVシフトによるCO<sub>2</sub>大幅削減を唱えてきたが、EVが救世主になり得ないことによりやく気付いた。
- ②自動車産業は新車のみならず既販車も含め、CO<sub>2</sub>を2019年比で2030年までに48%削減する必要がある。新車対応だけでは目標達成はできない。
- ③自動車のCO<sub>2</sub>排出量はWtW、あるいはLCA(製造から廃棄まで)でカウントする必要がある、電力の排出係数次第では、EVはHEVよりもCO<sub>2</sub>排出が多くなる。
- ④既販車のCO<sub>2</sub>削減にはガソリン、軽油に混合してもエンジン性能に問題のないdrop in fuel(炭化水素系のカーボンニュートラル燃料)の市場導入が急務。

以上の4点について、専門的な知識や科学的なデータをもとにしてお話をいただきました。

初めに、世界の気候変動に伴う各地での被害状況から、CO<sub>2</sub>削減は本当に待たなしであるということ、6年後の2030年までにCO<sub>2</sub>を2019年比で48%削減することができなければ、車も作れない、エアコンも家電も作れない、今までと同じ生活はできなくなるということについての問題提起がありました。そして、現在世界各国でどのような対策が取られ、すすめられているのか、また現状の取組では気候危機の連鎖を止めることはできない、気温上昇も止まらない、もう後がないという状況についての解説をいただきました。最後に2030年までにCO<sub>2</sub>の48%削減を達成するための道筋についてのシナリオの提案がありました。

まとめとして、「2030年までに真剣にCO<sub>2</sub>削減を進めないと、それ以降の経済成長どころか人類の未来は無い。2030年は、我々人類の岐路となる。政府任せではなく、産業界全てが高い志と覚悟をもって動かなければならない。破滅か存続かのカウントダウンはすでに始まっている。」と締めくくられました。参加者からは、「大変興味深い内容で、危機感を持ちました。個人として、また、子供たちに対して何をどう行動しなければならないのか...具体的に考えたいです。」といった感想をいただきました。

令和6年度 第56回 全国小中学校環境教育研究大会  
 第60回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
**持続可能な社会づくりのための環境教育の推進**  
 ～環境教育によって育む学力と環境保全意識～

### I 主題設定の理由

今年度は、総合的な学習の時間を中心とした「学校ビオトープ」の活用に焦点を当てた。より身近な環境への保全意識を高めることで、多岐にわたる環境課題をより自分事として捉え、具体的に考え、行動することができるようになると考えた。

これまで本研究会が取り組んできたESDは、その実現を可能にすると信じる。それは教育の、教師の、そして児童・生徒の変容をまさに希求するものである。

### II 研究の過程

- 1 学校現場でのESD推進状況の確認
- 2 取り組み可能な課題の検討
- 3 昨年度の研究の検証
- 4 学校ビオトープを活用した教材、単元開発、授業構築
- 5 研究会員の学校における授業実践（一部）
- 6 ポートフォリオによる授業検証

### III 授業実践例

小学校第2学年 生活科

「生きものなかよし大作せん」

#### (1) 単元の目標

- (ア) 生き物やなかよし花壇に関心を持ち、親しんだり大切にしたりすることができる。
- (イ) 生き物が住んでいる環境の様子や生き物の変化の様子など、考えたことを表現することができる。

#### (2) 単元計画（5時間）

時	内容
1	身近な生き物に関心をもって関わるができる。
2	身近な生き物に関心をもって関わるができる。
3	これまでの経験や聞いたたり調べたりしたことを基に、生き物のいる場所を予想し、生き物の育つ場所の特徴に気付くことができる。

4	生き物にとって快適な環境について考えることができる。
5	生き物に親しみを持ち、どのような場所が棲みやすいのか考え、また、そのような環境を保つために、自分たちに何が出来るかを考えることができる。

#### (3) 本時について

	内容
導入	①これまでに見つけた生き物を振り返る活動を行う。 生きものたちがあんしんしてらせるお家を作ろう
展開	②木の循環と自然保護に関する学ぶ（建設企業によるレクチャー） ③理想の生き物の家を考える ④理想の生き物の家を製作する
まとめ	⑤製作した家を共有する。 工夫した点をグループ→全体の流れで共有をする。

生き物の家の制作や木の循環に関する授業を通じて、児童が「自然や木を守るために自分たちができること」を具体的に考え、行動する意識が高まったと感じている。実際に単元終了後も校内で生き物の採集、観察を楽しむ児童が増え、係活動も活発になった。本紙では、小学校2年生の事例を掲載したが、小学校5・6年生、中学校3年生についても、「学校ビオトープ」を活用した単元開発も行った。



### IV 成果と課題

どの校種、学年においても学校ビオトープの活用により、多くの児童・生徒がより生き物や自然を身近に感じ、その環境を守りたいという意識の変容が見られた。

※研究詳細は研究会ホームページをご覧ください。

## 令和7年度 東京都小中学校環境教育研究会 研究員募集

東京都小中学校環境教育研究会では、研究員を募集しています。年10回程度研究部会を実施し、環境教育の教材、単元及び授業開発を行っています。興味のある方は、下のQRコードからお申込みください。



<お問い合わせ先> 本研究会 研究・広報部長  
 町田市立小中一貫ゆくのき学園 大戸小学校・武蔵岡中学校  
 校長 鈴木 元 電話042(782)9091

## 『みんなでつくり持続可能な社会』『みんなで守ろう豊かな自然』

## 第27回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール

多摩市立鶴牧中学校 副校長 天野 拓二

今昨年に続き、2024年の夏も猛暑となりました。環境の変化、温暖化はもう走り出してしまったようです。このような状況に、強烈な危機感を抱いた方も多かったのではないかと思います。そのような中、今年度も環境絵画コンクールを実施しました。

このコンクールは、「絵を描く」という表現方法、活動を通じて環境への意識を高めることで、自分たちの行動そのものが地球環境の保全に向けての第一歩であり、影響を与えることが出来ることを意識、実感してほしいとの願いから、毎年開催しています。

『みんなでつくり持続可能な社会』『みんなで守ろう豊かな自然』をテーマとして、文部科学省、環境省、日本環境協会の後援をはじめ、(株)みずほフィナンシャルグループ、明治安田生命保険相互会社、丸紅(株)、積水化学工業(株)の協賛をいただき、全国の児童・生徒を対象に5月中旬から9月9日までの期間で作品を募集しました。第22回から環境大臣賞の受賞作品が、環境省の環境白書の表紙絵に選定されています。

今年度は、募集期間中に、小学校の部167団体2689作品、中学校の部235団体1275作品、合計3964作品が、全国各地より送られてきました。環境問題へのメッセージが伝わる作品が多く、本コンクール活動が全国に更に広がってきていることを実感できました。昨年度からの急激な環境の変化や猛暑等、実体験として感じた環境危機。児童・生徒の環境に対する興味関心は更に高められ、表現し、伝えていくことの大切さを、まさに感じたのではないのでしょうか。

また、昨今の持続可能な社会に対する関心が高まる中、児童・生徒を文化的・創作的な活動に導いていただく環境を用意していただいた教育行政関係者をはじめ、協賛企業、関係団体様のご支援があったことだと思います。本当にありがとうございました。

## 【応募作品について】

主に次の基準に沿って審査を行いました。

- テーマに沿っている
- 児童・生徒の意見や願いが分かる
- デザインや構成に工夫がある
- 他の作品の模倣や類似ではない
- その他、人権上の配慮 など

児童、生徒でしか出せない、柔軟で新しい発想、技術的にも高度で丁寧に仕上げている作品も多く、何より、環境への意識の高まりや日常生活で環境問題にどのように取り組むかということを伝えようとする姿勢が伝わってきました。

審査の結果、小中学校別に、文部科学大臣賞、環境大臣賞、会長賞、みずほ特別賞、明治安田生命特別賞、丸紅特別賞、積水化学特別賞(以上各1点ずつ)、佳作(小中各10点ずつ)のほか、学校賞として東京都世田谷区立玉堤小学校、群馬県前橋市立第一中学校の受賞が決まりました。



【第27回環境絵画コンクール表彰式の様子】

## 研修会報告

## 野鳥観察会 ～冬の多摩川中流域で見られる野鳥について～

日の出町立平井小学校 校長 森田 哲生

令和7年2月22日(土)、東京都福生市付近の多摩川にて野鳥観察会を実施しました。当日は雪が舞う寒い日でしたが、小・中学校の教員とご家族、合わせて17名の参加があり、野鳥の姿を楽しみながら観察しました。

講師としてお招きしたNPO法人自然環境アカデミーの野村亮先生は、豊富な知識とわかりやすい解説で、参加者の興味を引きつけてくださいました。

観察会では、アオサギ、ダイサギ、コサギ、オオバン、カイツブリなどの水鳥のほか、ハクセキレイ、トビ、モズ、ツグミ、カシラダカなどの多くの野鳥を観察することができました。また、カワセミが一瞬姿を見せる場面もあり、参加者から歓声が上がりまし



た。さらに、野村先生の説明を通じて、近年の野鳥の生息環境の変化や、気候変動・都市開発が野鳥に及ぼす影響について学ぶ貴重な機会となりました。

寒さを忘れるほど充実した観察会となり、参加者からは「野鳥の見分け方がよく分かった」「自然環境の大切さを改めて感じた」といった感想が寄せられました。今後もこのような機会を設け、自然とのふれあいを深めていきたいと思っています。